

平成21年度事業報告

(1) 学術集会および会務

A) 学術集会

1. 第57回総会（平成21年6月3日～5日）
会場：ホテル日航東京
会長：山口恵三（東邦大学医学部微生物・感染症学講座）
2. 第56回東日本支部総会（平成21年10月30日～31日）
会場：東京ドームホテル
会長：岩田 敏（国立病院機構東京医療センター小児科）
3. 第57回西日本支部総会（平成21年11月26日～28日）
会場：名古屋国際会議場
会長：三嶋廣繁（愛知医科大学感染制御部）
4. 本年関連国際学会として
第26回国際化学療法学会
（平成21年6月18日～21日・トロント）

B) 会務

1. 年度末正会員数 5,444名
年度末賛助会員数 29団体、団体会員数 205団体
2. 平成21年度評議員会、同定期総会は上述の第57回総会時に開催された。
3. 新評議員（平成21年5月～平成22年4月）

東日本支部7名（現在230名）

- 神田 裕子（第一三共株式会社生物医学研究所）
小林 昌宏（北里大学病院薬剤部）
佐々木 淳一（慶應義塾大学医学部救急医学）
山藤 満（富士重工業健康保険組合総合太田病院薬剤部）
白石 正（山形大学医学部附属病院薬剤部）
福田 秀行（杏林製薬株式会社研究企画部）
堀野 哲也（東京慈恵会医科大学感染制御部）

西日本支部6名（現在214名）

- 栄田 敏之（京都大学大学院薬学研究科統合薬学フロンティア教育センター）
高橋 佳子（兵庫医科大学病院 感染制御部）
平田 純生（熊本大学薬学部附属育薬フロンティアセンター臨床薬理学分野）

二神 幸次郎 (福岡大学病院薬剤部)

森 健 (名城大学薬学部薬学教育センター医薬連携部門病態解析学Ⅱ)

森田 邦彦 (同志社女子大学薬学部臨床薬剤学)

4. 理事会 7 回開催

平成 21 年 4 月、6 月、7 月、9 月、10 月、11 月、平成 22 年 2 月

C) 事業報告

1. 編集委員会

1) 日本化学療法学会雑誌 (委員長 堀 誠治)

・編集委員会 6 回開催

・編集状況

平成 21 年 第 57 巻

一般誌 6 冊 (掲載論文数 25 編)

新薬特集号 2 冊 (掲載論文数 26 編)

平成 22 年 第 58 巻

一般誌 3 冊 (掲載論文数 9 編)

新薬特集号 1 冊 (掲載論文数 7 編)

その他編集中 1 冊

・日本化学療法学会電子情報配信誌「JSC-WIRE」の発行

2) Journal of Infection and Chemotherapy (委員長 小林芳夫)

・編集委員会 11 回開催

・編集状況

平成 21 年

Vol. 15 No. 1～6 (掲載論文数 83 編)

平成 22 年

Vol. 16 No. 1～2 (掲載論文数 31 編)

Online First 29 編

・JIC Award 受賞

千葉 菜穂子 (北里大学大学院感染制御科学府感染制御科学)

「Rapid detection of eight causative pathogens for the diagnosis of bacterial meningitis by real-time PCR」(Vol.15 No.2 p92-98)

3) 用語委員会 (委員長 清田 浩)

抗菌化学療法用語集の改訂作業を始めた。

日本化学療法学会雑誌、日本感染症学雑誌および Journal of Infection and Chemotherapy で採用された新たな用語候補と旧用語集の用語について各委員で検討を行った。

2. 学術委員会（委員長 塚本泰司）

- ・認定学術集会 申請 17 件 認定 17 件（平成 20 年度 申請 15 件、認定 15 件）
- ・学術奨励賞受賞者

第 57 回総会

崔 龍洙（順天堂大学医学部細菌学）

「染色体の突然変異による黄色ブドウ球菌のバンコマイシン耐性」

平間 崇（埼玉医科大学呼吸器内科）

「標準化半定量 PCR 法を用いた呼吸器感染症の起炎菌同定法」

日本化学療法学会雑誌

神田 裕子（第一三共株式会社生物医学研究所）

「*In vitro* 血中濃度シミュレーションモデルを用いた *Streptococcus pneumoniae* および *Escherichia coli* 耐性化防止のための levofloxacin の至適投与法の検討」

Journal of Infection and Chemotherapy

祖母井 庸之（帝京大学医学部微生物学講座）

「Downregulation of immunomodulator gene expression in LPS-stimulated human polymorphonuclear leukocytes by the proton pump inhibitor lansoprazole」

- ・海外留学補助制度の選考を行い、下記の 2 名に補助金を交付した
萩原真生（愛知医科大学附属病院薬剤部）
五味和紀（東北大学加齢医学研究所呼吸器腫瘍研究分野）

3. 会則検討委員会（委員長 鈴木賢二）

抗菌薬適正使用生涯教育積立基金、西太平洋学術交流基金の各取扱い規程および情報公開規定を検討した。

4. 学会賞選考委員会（委員長 荒川創一）

志賀潔・秦佐八郎記念賞の候補者について検討し選考を行った。

受賞者：守殿貞夫（神戸赤十字病院）

研究テーマ：「動物実験モデルによる尿路性器感染症の病態解明と *in vivo* 抗菌薬薬効評価システムの確立」

5. 国際渉外委員会（委員長 松本哲朗）

- 1) 第 28 回国際化学療法学会の日本への誘致に成功し、2013 年 6 月横浜にて開催とし、会長を松本哲朗理事に決定した。
- 2) 国際化学療法学会の理事改選が行われ、河野茂理事が副理事長に就任した。
- 3) 国際化学療法学会の Asia-Pacific 担当の Executive director に松本哲朗理事が就任し、Asia-Pacific Office を北九州に置いた。
- 4) 第 26 回国際化学療法学会（トロントにて開催）において、JSC-sponsored symposium として、下記の 2 本を行った。
 - ・ Present and future strategies for clonal spread of drug-resistant microbes
 - ・ The perspective of macrolides

- 5) 故大越正秋先生の追悼文を ISC の HP および IJAA に掲載した。
- 6) 西太平洋化学療法学会への会費として、800USD (2010~2014 年分) を納入した。

6. 臨床試験委員会 (委員長 河野 茂)

製薬メーカーに「抗菌薬・抗真菌薬・抗ウイルス薬の開発候補品の調査」を実施した。

7. 抗菌薬安全性評価基準検討委員会 (委員長 渡辺 彰)

抗菌薬安全性評価基準のうち、臨床検査値変動に関する評価基準を策定し、パブリックコメント対応を経て、「抗微生物薬安全性評価基準検討委員会 中間報告 (臨床検査値に関する安全性評価基準)」として日本化学療法学会雑誌 57 巻 4 号で正式に報告した。また、各社保有の有害事象データを用いて、抗菌薬で出現する主な有害事象を抽出・分析し、症状・所見に関する有害事象の評価を含む抗微生物薬安全性評価基準を最終化し、パブリックコメント対応の後、「抗微生物薬安全性評価基準検討委員会 最終報告」として策定を完了した。

8. 抗菌薬臨床試験指導医・指導者制度委員会 (委員長 三嶋廣繁)

1) 指導者制度講習会開催 (年3回: 36、37回、38回)

第57回日本化学療法学会総会: 平成21年6月5日 (東京)

第56回東日本支部総会: 平成21年10月31日 (東京)

第57回西日本支部総会: 平成21年11月27日 (名古屋)

2) 抗菌薬臨床試験指導医・指導者制度および抗菌薬臨床試験認定医、認定者制度を発足させた。

3) 試験問題を作成した

9. 抗菌薬化学療法認定医認定制度審議委員会 (委員長 三笠桂一)

・抗菌薬適正使用生涯教育セミナー開催

第8回 平成21年6月3日 ホテル日航東京

第9回 平成21年8月30日 東京国際フォーラム

第11回 平成21年10月29日 東京ドームホテル

第12回 平成21年11月26日 名古屋国際会議場

・抗菌薬適正使用生涯教育ビデオセミナー

東京 (第10回) 平成21年10月11日 日内会館

神戸 平成21年10月18日 神戸大学医学部大講義室

福岡 平成22年1月24日 九州大学医学部百年記念講堂

札幌 平成22年2月28日 札幌医科大学記念ホール

仙台 平成22年3月7日 東北大学医学部臨床小講堂

・委員会を数回開催

・指導医・認定医・認定歯科医の認定申請

・認定者 指導医: 36名 認定医: 206名 認定歯科医師: 32名

10. 抗菌化学療法認定薬剤師制度委員会（委員長 竹末芳生）

- ・認定薬剤師講習会の開催

第1回 平成21年6月12日 朱鷺メッセ

第2回 平成21年10月23日 長崎新聞会館

- ・認定薬剤師テキスト

保険適応にとらわれず、PK-PD や無作為比較試験、メタ分析などで根拠のある抗菌薬治療を前提としたテキストの作成。企画概要により執筆者を決めて、執筆を依頼した。

- ・TDM 標準化ワーキング

平成21年7月に「抗MRSA薬のTDM実態調査」の為、全国563施設にアンケートを送付し、結果を第56回東日本支部総会で発表した。また、日本化学療法学会雑誌57巻1号に委員会報告として掲載し、2号に「わが国における抗MRS A薬のTDMに関する全国調査」を掲載した。

- ・認定薬剤師試験実施

問題を作成し、試験問題作成ワーキングでブラッシュアップを行った。

試験は平成22年2月28日に東京慈恵会医科大学中央講堂で行い、申請者156名のうち136名が合格した。合格者は3月1日付けで認定薬剤師として認定された。

11. 抗菌薬ブレイクポイント委員会（委員長 門田淳一）

前回の委員会報告（日本化学療法学会雑誌 第53巻9月号、2005年）以降開発・発売された新規薬剤を中心とし、前回までに設定されていなかった薬剤を含めた抗菌薬について、呼吸器感染症（肺炎、慢性気道感染症）、敗血症、尿路感染症におけるブレイクポイントを委員会報告として論文化した（日本化学療法学会雑誌 第57巻4号、2009年）。

12. 抗菌薬感受性試験微量液体希釈法検討委員会（委員長 山口恵三）

当学会会員および臨床微生物学会会員へのアンケート結果解析から、インフルエンザ桿菌に対する微量液体希釈法 CLSI 法 HTM 培地の問題点が浮かび上がった。

基礎培地ミュラーヒントンブロスに、NAD、Hematin、酵母エキスを添加する CLSI 法とは異なり、Hematin の代わりに 5%馬溶血液を添加している日本化学療法学会法培地の再評価研究が本委員会のテーマとして取り上げられた。

平成20年度では日本化学療法学会法培地と CLSI 法培地の比較を、PhaseI および PhaseII 試験*により実施し成績をまとめ、平成21年度では、その成績を解析評価し、第57回日本化学療法学会で委員会報告として会員に経過を報告し、さらに同学会開催中に参加協力施設への報告検討会を実施し、ディスカッションを行った。

* PhaseI 試験：インフルエンザ桿菌に対する微量液体希釈法の日本化学療法学会法培地と、CLSI 法 HTM 培地に対する2菌株の精度管理株を用いた7施設による比較試験を行った。30回の測定を行い、主に施設間差の有無を解析した。

* PhaseII 試験：PhaseI 試験により施設間差の解析終了後、共通配布株30菌株

(BLNAR, BLPAR, BLNAS を含む)、各施設分離株 20 菌株、CLSI 法培地および化学療法学会法培地の各 3Lot のプレートを用い測定を行い、培地間の比較解析を行った。

参加協力施設への報告検討会でのディスカッションにおいて、CLSI 法と、化学療法学会法の PhaseII 比較に、発育性の結果のデータが十分反映されていなかったことから、発育性に関する追加試験の必要性が指摘され、以下の試験を平成 21 年の 9 月以降 12 月末までに行うこととなった。

・追加試験

発育不良 20 株、発育良好 20 株で構成される共通配布 40 株 (BLNAS、BLNAR、BLPAR を含む) および、各施設から分離される新鮮臨床分離株 (10 株程度) に対し、CLSI 法培地、化学療法学会法培地の配布プレートで、それぞれ随時微量液体希釈法測定を実施し、結果を解析する。

現在得られた結果について解析中であるが、概略として以下のようにまとめる方向で検討している。

1) 発育性の比較

配布共通株 40 株および各施設新鮮分離株の CLSI 法培地、化学療法学会法培地の配布プレートにおける発育性は、有意差は得られなかったものの、化学療法学会法で良好である傾向が示された。これについては、さらに濁度計測の追加試験を行い、定量的に発育性の比較を行うこととした。

2) 追試共通株 40 株の感受性測定値の結果比較

配布共通株 40 菌株および各施設新鮮分離株に対する各抗菌薬の MIC 値の両方法間の比較の結果、PhaseII で得られた成績とほぼ同じ傾向が示された。

すなわち、βラクタム系抗菌薬、マクロライド系アジスロマイシンにおいて、化学療法学会法で幾何学的平均 MIC 値が、CLSI 法でのそれよりも 1.5~1.9 倍ほど高く、一方 ST 合剤では逆に化学療法学会法の MIC 値が、CLSI 法よりも 1.5 倍低い結果であった。

この結果に対し、同様の傾向を示した研究論文が 1987 年の *J.Clin.Microbiol* に掲載されていた (Jorgensen JH., Improved Medium for Antimicrobial Susceptibility Testing of *Haemophilus influenzae*. *J Clin Microbiol*.1987. 25:2105-2113)。

ST 合剤については 5%馬溶血液添加ミュラーヒントンブロス(LHB)において平均 MIC 値が、HTM 培地に比べ小さくなることがこの論文にて示されていた。サルファ剤は、ペプトンなど培地成分による拮抗作用を受け、ペプトンを含まないミュラーヒントンブロスにおいても拮抗作用のあることが、本学会の「ST 合剤研究会 MIC 測定法のための小委員会」にても報告され、馬溶血液の添加により、培地の拮抗作用が中和されることが明らかにされている(Chemotherapy. 1973.21:67-75)。

以上の結果をもとにした、本微量液体希釈法改訂委員会での改訂の方向性は以下のよう
にまとめられる。

米国と日本ではインフルエンザ桿菌感染症に対して使用する抗菌薬が異なり、米国では ST 合剤の使用頻度が高い。日本ではほとんど使用されない。そのため化学療法学会法で

ST 合剤の MIC 値が低く出る結果については、注意事項として理由を付記することにより、特に問題とならないと結論づけられる。さらに実際の体内では S T 合剤は当然ながら血液に暴露されるので、化学療法学会法において低く出る MIC 値のほうが、むしろ現実的であるとも考えられる。CLSI 法、化学療法学会法、どちらが真値を表しているのかは議論が残る。

さらに各施設新鮮分離株合計 189 株の化学療法学会法の MIC 値を、CLSI の感受性カテゴリー SIR に当てはめてみると、CLSI 法培地による MIC 値による SIR の分布から外れたのは 8 株 (4%) で、それも I vs R あるいは、I vs S の違いにとどまり、S が R となる Major error、R が S となる Very major error になる差は見られなかった。

一方、日本では臨床分離アンピシリン耐性株の中にアンピシリンの MIC 値がそれほど高くはない BLNAR 株の占める割合が高いのに対し、米国ではアンピシリン MIC 値が高い BLPAR 株の分離頻度が高い。この点では化学療法学会法でアンピシリンの MIC 値が高く出る結果は、むしろ BLNAR 株を検出する上で適しているとも考えられる。

もし化学療法学会法の方が、BLNAR 株をより正しく検出できるとするならば、化学療法学会法培地の使用は、BLNAR 株の分離率が高い日本で有効と考えられる。従って追加試験として、ワクナガの BLNAR 遺伝子検出キットを用いて共通株 40 株の BLNAR 耐性遺伝子型を特定し、偽陰性株の割合がどちらの方法で少ないかを調べることにした。

3) 最終的なまとめの方向性

上述した追加試験を実施し、その結果を精査し、委員会で最終解析した後、微量液体希釈法改訂委員会として、インフルエンザ桿菌に対する化学療法学会法培地の再評価として文章化する。また日本化学療法学会微量液体希釈法の記載を再度整え、日本化学療法学会微量液体希釈法を英文化し、JIC に掲載することとする。

13. 三学会合同抗菌薬感受性サーベイランス委員会（実務委員長 渡辺 彰）

- 1) 平成 17 年に発足した日本化学療法学会サーベイランス事業は、平成 21 年より日本感染症学会、日本臨床微生物学会との三学会合同事業となり、「三学会合同抗菌薬感受性サーベイランス」と名称を改めた。
- 2) 第 1 回 三学会合同抗菌薬感受性サーベイランスは、呼吸器感染症と急性単純性膀胱炎・尿道炎の 2 領域を対象に実施した。
- 3) 4 年目になる呼吸器感染症では、収集する菌種に *Mycoplasma pneumoniae* を追加した。また、調査薬剤の公募で申し込みがあった薬剤のうち garenoxacin (GRNX) を今後、調査薬剤とすることを決定した。
- 4) 日本外科感染症学会より依頼された手術部位感染 (SSI) を対象としたサーベイランスを次年度に実施することとし、実施要綱を作成した。また、日本外科感染症学会が参加をお願いしている医療機関を対象に説明会を開催した。
- 5) 成績の公表
 - ・当学会の事業として実施した第 2 回 (2008 年) サーベイランス (呼吸器感染症) の成績が *Journal of Infection and Chemotherapy* (15 巻 3 号 : 156-167) に掲載された。
 - ・当学会第 3 回 (2008 年) サーベイランス (呼吸器感染症、複雑性尿路感染症) の成績を第 26 回 国際化学療法学会 (ICC、6 月、トロント) で発表した。

- ・本事業の活動報告を三学会それぞれの総会で行う。
日本臨床微生物学会（2010年1月）、日本感染症学会（2010年4月）、
日本化学療法学会（2010年6月）

14. UTI薬効評価基準見直しのための委員会（委員長 松本哲朗）

UTI 薬効評価基準を改め、「尿路性器感染症に関する臨床試験実施のためのガイドライン」とし、第1版を日本化学療法学会誌、第57巻6号に掲載した。

15. 抗真菌薬臨床評価委員会（委員長 河野 茂）

今後の深在性真菌症治療薬の開発を目的とする基本的な考え方を示すため、その指針作成を行う委員会を定期的に開催した。現在、機構に提出する指針の最終段階になっている。

16. 嫌気性菌感染症治療のガイドライン改訂委員会（委員長 三嶋廣繁）

3月8日にワーキングを開催し、「嫌気性菌感染症治療のガイドライン」の英訳版の最終校正を行った。

17. レジオネラ治療薬評価検討委員会（委員長 斎藤 厚）

- 1) 第57回日本化学療法学会総会において第1回症例検討会での検討成績を発表
- 2) パンフレットの改訂とホームページ掲載の実施要綱、参加会社等の変更
- 3) 新規参加製薬企業に対して説明会を実施

18. 呼吸器感染症における新規抗微生物薬の臨床評価法見直しのための委員会（委員長 河野 茂）

- ・平成21年4月24日 第5回委員会開催（東京）
- ・平成21年7月2日 第6回委員会開催（東京）
- ・平成21年10月30日 第7回委員会開催（東京）
- ・平成21年11月26日 第8回委員会開催（名古屋）

肺炎の臨床評価法についてほぼ改訂案がまとめられた。

慢性肺疾患の急性増悪の臨床評価法の改訂案を、現在検討中である。

19. 未承認薬検討委員会（委員長 三嶋廣繁）

- ・厚生労働省より「未承認の医薬品又は適応の開発の要望に関する意見募集」があり、8月に10薬剤について要望書を提出した。
- ・9月にICDの所属している施設1,888箇所にシプロフロキサシン注射剤一日投与量に関する実態調査のアンケートを行った。

20. 抗MRSA薬適正使用委員会（市販後調査）（委員長 草地信也）

抗MRSA薬に使用実態に関するアンケートをまとめた。

21. 感染症治療ガイド作成委員会（委員長 青木信樹）

日本感染症学会と合同で日本独自のポケットガイド「JAID/JSC 感染症治療ガイド2010」を作成することになり、敗血症、好中球減少性発熱症、細菌性髄膜炎、中耳炎・副鼻腔炎、感染性心内膜炎、肺炎、気道感染症、骨髄炎、腹膜炎、皮膚軟部組織感染症、尿

路・性器感染症、性感染症、術後感染予防の 13 種についてワーキングを立ち上げ検討を始めた。

22. 社会保険委員会（委員長 河合 伸）

セファドロキシル ドライシロップ 100mg 製剤の必要性について検討した

23. 新公益法人検討委員会（委員長 戸塚恭一）

公益社団法人移行認定の申請の準備を開始した。

24. インфекションコントロールドクター (ICD)制度

平成 21 年 12 月 認定者 56 名（申請者 56 名）

平成22年度事業計画

(1) 学術集会および会務

A) 学術集会

1. 第58回総会（平成22年6月2日～4日）
会場：長崎ブリックホール
会長：河野 茂（長崎大学医学部第二内科）
2. 第57回東日本支部総会（平成22年10月21日～22日）
会場：京王プラザホテル
会長：二木芳人（昭和大学医学部臨床感染症学）
3. 第58回西日本支部総会（平成22年11月25日～26日）
会場：大分全日空ホテル オアシスタワー
会長：門田淳一（大分大学医学部総合内科学第二講座）
4. 本年関連国際学会として
第12回西太平洋化学療法・感染症学会
（平成22年12月2日～5日・シンガポール）

B) 会務

1. 理事会、評議員会の開催について
理事会年8回、評議員会年1回を予定
2. 関連団体への対応
日本医学会に評議員及び医学用語委員会委員を、日本医師会に疑義解釈委員会委員を、
内科系学会社会保険連合にそれぞれの委員を派遣する。

C) 事業計画

1. 編集委員会

- 1) 日本化学療法学会雑誌
 - ・6冊発行予定
 - ・新薬特集号を3冊発行予定
 - ・編集委員会を隔月開催する
 - ・日本化学療法学会電子情報配信誌「JSC-WIRE」を月1回配信
- 2) Journal of Infection and Chemotherapy
 - ・編集委員会を隔月開催とする
 - ・6冊発刊予定
 - ・電子査読を開始する予定
- 3) 用語委員会
抗菌化学療法用語集改訂案をホームページに掲載し、会員からパブリックコメントを求め、最終版をホームページに掲載する予定である。なお用語集は前回までのような出版物として刊行はせず、今後新規用語があれば随時学会ホームページに最新

版を更新していく予定である。

2. 学術委員会

認定学術集会の認定および学術奨励賞を選考する。

海外留学補助制度の選考を行う。

3. 会則検討委員会

公益社団法人移行に向けて各種規程を検討する予定である。

4. 学会賞選考委員会

志賀潔・秦佐八郎記念賞の選考を行う。

5. 国際渉外委員会

- 1) 第12回西太平洋化学療法学会（2010年12月、シンガポールにて開催予定）において、JSC-sponsored symposiumを1本行う予定である。
- 2) 第1回日本・台湾感染症シンポジウムを、2010年5月に台北にて開催予定である。
- 3) 第28回国際化学療法学会議（横浜、2013年）の開催準備を行う。
- 4) 第27回国際化学療法学会議（ミラノ、2011年）のための募金活動を行う。

6. 臨床試験委員会

依頼があれば適宜、対応していく予定である。

7. 抗菌薬安全性評価基準検討委員会

平成21年度事業として策定完了した「抗微生物薬安全性評価基準検討委員会最終報告」につき、日本化学療法学会雑誌ならびにJournal of Infection and Chemotherapyに和文・英文にて公表する。あわせて第58回 日本化学療法学会総会（長崎）にて発表し、本委員会の活動を完了する。

8. 抗菌薬皮内反応検討委員会（委員長 渡辺晋一）

抗菌薬に対するアレルギースクリーニング目的の皮内反応中止通知後における抗菌薬皮内反応試験の実施状況とアナフィラキシー反応に関する実態調査」を日本化学療法学会雑誌に発表する予定である。

9. PK-PD検討委員会（委員長 岩田 敏）

抗菌薬のPK-PDガイダンス原案について厚生労働省からの回答を待ち、了承されたら冊子にする予定である。

10. 抗菌薬臨床試験指導医・指導者制度委員会

- 1) 指導者制度講習会開催予定（年3回：39、40回、41回）
 - 第58回日本化学療法学会総会：2010年6月4日（長崎）
 - 第57回東日本支部総会：2010年10月21～22日（東京）
 - 第58回西日本支部総会：2010年11月25～26日（大分）
- 2) 新規申請、更新申請を受け付ける
- 3) 8月末までに新規申請者の試験を実施する

11. 抗菌化学療法認定医認定制度審議委員会

- ・ 抗菌薬適正使用生涯教育セミナー開催予定
 - 第 13 回 平成 22 年 6 月 2 日 長崎ブリックホール
 - 第 14 回 平成 22 年 8 月 29 日 東京国際フォーラム
 - 第 15 回 平成 22 年 10 月 17 日 日内会館
 - 第 16 回 平成 22 年 10 月 京王プラザホテル
 - 第 17 回 平成 22 年 11 月 大分全日空ホテル オアシスタワー
- ・ 委員会を数回開催予定
- ・ 1 日コースのビデオを作製し教育資材として販売する
- ・ 11 月末 指導医・認定医・認定歯科医の認定申請締め切り
- ・ 12 月 上記申請者認定のための作業委員会
- ・ 平成 23 年 1 月 1 日付けで認定

12. 抗菌化学療法認定薬剤師制度委員会

- 1) 認定薬剤師講習会の開催
 - ・ 第3回 平成22年年6月25日 札幌サンプラザ
 - ・ 第4回 平成22年年11月12日 幕張メッセ
- 2) 認定薬剤師テキスト
 - 9月頃の発行予定である。
- 3) 認定薬剤師試験実施
 - 認定薬剤師申請者の試験を行い、認定する。

13. 抗菌薬ブレイクポイント委員会

これまでの設定された抗菌薬のブレイクポイントをホームページ上に公表し、平成 21 年度でブレイクポイントを設定した薬剤以降に上市された抗菌薬のブレイクポイントの設定を行う。これまでのブレイクポイントでは投与回数についての規程が明確ではないため、投与回数に関しても今後は明記していくかを検討する。また尿路感染症ブレイクポイントに関しての検証が十分ではないため、そのあり方について議論を行う。

14. 抗菌薬感受性試験微量液体希釈法検討委員会

- ・ 日本化学療法学会微量液体希釈法改訂の英文化および、JIC への投稿する予定。
- ・ 本来は平成 21 年度において本委員会の活動は終了となるが、事業報告の記載にあるように詰め追加試験が年度末に必要となった。そのため最終的な日本化学療法学会微量液体希釈法の英文誌への掲載作業に期日的なずれが発生した。従って、今回の改訂作業による成果を加え本法の体裁を整え、英文化する作業を新たに平成 22 年度の事業計画として行うこととした。また微量液体希釈法改訂委員会として得られた科学的な成果を、各学会および科学雑誌へ積極的に投稿をする予定である。

15. 三学会合同抗菌薬感受性サーベイランス委員会

- 1) 第 2 回 三学会合同抗菌薬感受性サーベイランスの実施

呼吸器感染症、手術部位感染（SSI）の2領域を対象に実施し、2011年3月までに成績をまとめる。

2) 第3回（2011年）三学会合同抗菌薬感受性サーベイランスの実施要綱を9月までに作成し、2011年1月から菌株を収集する。

3) 成績の公表

- ・当学会の事業として実施した第3回（2009年）サーベイランス（呼吸器感染症、複雑性尿路感染症）の論文をJICに掲載する。
- ・第1回（2009年）三学会合同抗菌薬感受性サーベイランス（呼吸器感染症、急性単純性膀胱炎・尿道炎）の成績を国内外の学会で発表する。また、論文をJICに掲載する。

16. UTI薬効評価基準見直しのための委員会

「尿路性器感染症に関する臨床試験実施のためのガイドライン」を冊子化及び英文化を行う予定。

17. 抗真菌薬臨床評価委員会

機構に提出する指針を確立し、提出する予定である。

18. 抗菌薬臨床評価ガイドライン改訂委員会（委員長 河野 茂）

抗菌薬臨床評価ガイドライン案について厚生労働省からの回答を待ち、了承されたら冊子にする予定である。

19. 嫌気性菌感染症治療のガイドライン改訂委員会

ガイドラインの英訳版をJICに投稿し、「嫌気性菌感染症診断・治療のガイドライン」の改訂に取り組む予定である。

20. レジオネラ治療薬評価検討委員会

- 1) 第1回症例検討会で検討していない症例について、第2回症例検討会を開催する。
- 2) 収集した菌株等の各種抗菌薬の抗菌活性を測定する。
- 3) レジオネラ症の診断法などに関する教育・啓発資料を作成する。
- 4) アジア地域におけるレジオネラ症の疫学・診断および抗菌薬療法に関する共同プロジェクトのワーキンググループを立ち上げ、6月末に中国での第1回ワークショップ開催を予定。
- 5) レジオネラ症例検討成績を学会誌に投稿する。
- 6) 調査終了薬剤について日本化学療法学会主導による自主研究形式のシステム作成。

21. 呼吸器感染症における新規抗微生物薬の臨床評価法見直しのための委員会

- ・3～4回の委員会を開催予定である。
- ・第58回日本化学療法学会総会（長崎）にて中間報告予定3～4回の委員会を開催する予定である。

22. 未承認薬検討委員会

シプロフロキサシン高用量検討部会で行ったアンケート結果をまとめて第58回日

本化学療法学会総会で発表の予定である。

23. 抗MRSA薬適正使用委員会（市販後調査）

厚生労働省に報告書を提出し、アンケート結果を和文誌に掲載する予定である。

24. 感染症治療ガイド作成委員会

13領域のワーキンググループで検討した原案を感染症治療ガイド作成委員会委員で査読し、作成された案を両学会のホームページに掲載して会員からパブリックコメントを求める予定である。

25. 社会保険委員会

要望があれば適宜、対応していく予定である。

26. 新公益法人検討委員会

引き続き公益社団法人移行認定申請に向けて準備する。

27. インфекションコントロールドクター(ICD)制度

申請締切：平成22年10月31日